

## 書齋，あるいは草庵

福岡女子大学教授 井上敏幸

## はじめに

多忙な日常生活の中で、ふと我に帰ることのできる空間を持っていることは、人間にとって大変重要なことであるように思う。生きていることを実感し、自分を見つめ直すべく自己に没入することのできる空間が保障されているということは、自分自身をリフレッシュし、新たな自分に出会い、さらには、自分の新しい面を育てることが保障されるということであって、人間にとって不可欠の基本的条件の一つであるといつてよいであろう。

おそらく我々人間は、有史以来変わることなくそうした空間を入手すべく努力し、そうして手にいれることのできたそれぞれの空間の中で、大袈裟にいえば、それぞれの生涯を送ったに違いないのである。個人にとってのそうした空間が、人間の精神生活の中で最も活発なる精神発現の場の一つであるとすれば、そうした空間のありよう、あるいは、そうした空間と人間のかかわりの具体を、日本の古典文学の中に探ってみることも、一つの試みとして許されることであろう。

そうした作品の代表として、平安時代の慶滋保胤しげのやすたね (?~997年又は1002年没) の『池亭記』(982年成立)、中世草庵の文学そのものといつてよい鴨長明かもちやうめい (1155?~1216年没) の『方丈記』(1212年成立)、そして近世を代表する俳人である松尾芭蕉まつお ばしやう (1644~1694年没) の『幻

住庵記』(1690年成立) をとりあげ、以下紙幅の許す範囲内で、それぞれの作品の特性とその作者個人の問題を考えてみることにする。

## 『池亭記』と保胤

漢文で綴られた『池亭記』は、平安朝中期の儒学者慶滋保胤が、50歳になろうとするころ、平安左京六条坊門南、町尻東隅(現在の京都市下京区上柳町辺)に、初めて住居を構えた折に草されたものである。作品は前半と後半に分けることができるが、前半は、「予、20余年このかた以来、東西二京を歴見する」にて始まり、西京は荒蕪し、東京も四条以北に家が集まり、京外の鴨河・北野に家や田畑が広がっているが、密集地は住むに心安からず、河辺野外の地は洪水濁水の恐れがあり、土地はやはり京内に求むべきことを述べたもので、当時の京都の町の変遷を知りうる史料として貴重なものといわれている。後半は、初めて建てた家が、池を中心に配置されている有様を述べ、続いて中務省の内記としての官人の生活を送りながら、家ではあくまで個人としての生活を楽しむ様子、およびその心境が綴られており、最後に自戒の詞を添えたものとなっている。(以下、本文の引用および解釈は、『新日本古典文学大系27本朝文粹』(岩波書店平成4年5月刊)の後藤昭雄氏の読み下し文と注釈とによる) 作者慶滋保胤は、儒門の中

で特に文筆に優れた者が任命される中務省の司官内記に勤務する六位の官人で、その職掌は、詔勅・宣命の草案や上下諸人の位記を造り、兼ねて御所の記録を掌るものだった。現代風にいえば、中央政府の中の下の官僚だったといえよう。

いま改めて、その住居全体の様子と生活のさまが描かれ、全面的に住居論が展開される後半部を、少し具体的に見てみることで、保胤における空間、住居論の独自性を窺ってみることにしよう。(ただし、以下の文章に於る「私」は保胤をさしている。)

**池亭の構造と景観** 住居は、六条以北の地を選び、広さは全部で「10有余畝」(一畝は240歩、一步は6尺4方、従って広さは2,400坪以上、中級官僚の平均の広さだといえる。参考山口博著『王朝貴族』講談社現代新書平成6年刊)。土地の高い部分に小山を築き、窪地に小池を掘り、その池の西に「小堂を置きて弥陀を安んじ、池の東に低屋を起て、妻子を」住まわせている。およそ「屋舎は十の四、池水は九の三、菜園は八の二、芹田は七の一」で、その外に「緑松の島、白沙の汀、紅鯉白鷺、小橋小船」があつて、平生好むものの全てがこの中にある。そのうえ、春には東岸の柳があり、夏には北戸の竹があり、「秋は西窓の月有り、以て書を披くべ」く、「冬は南簷の日有り、以て背を炙る」ことができるという素晴らしい家である。

**作者の生活態度と池亭を愛する理由** 素晴らしいとは言っても、50歳近くになって得たこの家は、まことに小さな家で、それはちようど、蝸が「舎に安んじ」、虱が「縫に楽し」んでいる様に、また、鶇が「小枝に住みて鄧りん林の大きなるを望まず」、蛙が「曲井にあり

て、滄海の寛きことを知ら」ないのと同じだとの批判を甘受しなければならないことは、よくよく承知している。しかしながら私は、そうした批判を受けつつも、この家をこよなく愛してやまない。それは、私の職業としての学問・儒学と、私の生き方としての思想・儒学とがおのずからそのように導いたのだといつてよいのかも知れない。

家主である私の職業は、中の下の官僚であるが、実をいうと心はまるで山中に住んでいる人間のごとくである。というのも、私は官僚たちが血まなこになっている爵位などといったものは、それこそ天運だと思っているし、寿命も天に任せる以外にないと信じており、また、それかといつて出世を願っているわけでもなく、隠遁を決めこもうと思っているわけでもない。したがって、当然のことながら六位で緑色の服を着てはいるが、家に帰っては心を仏那によせ、清潔な白い麻の着物を着てくつろぐのである。そしてそうした折には、決してまず手を洗い、口をすすぎ、西堂に参り、弥陀を念じ、法華経を誦する。そして、食事を済ました後、東閣に入り書物を開き、古賢に逢うことが私の最上の喜びである。多くの古賢の中でも、特に私は、漢の五代皇帝文帝を時代を異にする主君だと考え尊崇している。それは、帝が儉約を好んで人民を安んじたからである。また、唐の詩人白樂天を最も尊ぶべき師だと考える。それは、白樂天が詩文に長じまた仏法に帰依した人物だったからである。そして晋の時代の7人の賢人、いわゆる竹林の七賢を最高の友だと思う。それは、彼らが朝廷に仕える身でありながら隠逸を志していたからである。このように私は、東閣において一日三遇の喜びにひたることが

できる。というのも、私には、現代社会のこの実人生の中に、一つとして恋うべきものがないからなのである。現代の人々の考える師というものは、位が高く富める人であり、決して文章の立派さでもって順序付けされた人達ではない。そのような師は、むしろいない方がよいのだ。同様に、現代の友というものも、権勢や利益でもって判断したもので、淡泊な交りをしようとはしない。そのような友は、これまた持たない方がよい。ということで、結局私は、門を閉ざしては、独吟独詠を専ら楽しみ、興が起これば、児童等と船に乗り、また暇を見ては、下僕を呼んでうしろの菜園に入り、肥料をやり、水をまいたりする。私は、以上のごとくに自分の家を専らに愛してやまないのである。

**自己批判と理想の住居論** しかし、私がか家を愛しているこうした様子を、私自身、また別の角度から見直してもいるのである。応和以来のこの20年間は、特に分不相応の贅沢な大きな家を造ることが流行し、その費用は莫大なものとなっているようである。ところが、そうした家にその造った人が住む期間は、わずかに二、三年だと聞く。「造れる者は居らず」という古人の格言の何と正しいことか。ひるがえって、このことを自分にあてはめてみると、自分もやはり世間の人々と全く同じことをしてしまったようである。私が、晩年になってこの家を建てたことは、私の分際にあてはめてみると、まことに贅沢で、私は天を畏れ、人に恥ずべきだと思われてくる。というのも、私がか家を作ったことは、旅人が仮の旅の宿を作り、老いた蚕がまゆを作るようなもので、私がかそこに住むことのできる時間は、もうどれほどもないからである。このよ

うに考えてくると、私は、いまさらながら聖賢がお造りになる家のことをつくづくと考えさせられる。

聖賢がお造りになる家は、民衆を使うこともなく、霊鬼をわずらわせることもない。仁義を以て棟梁となし、礼法を以て柱礎となし、道德を以て門戸となし、慈愛を以て垣牆となし、儉約を以て家庭の仕事とし、積善を以て家の財産となさっている。したがって、その中に居る者は、火も焼くことができず、風も倒すことはできない。妖魅も出現できず、災も来ることはできない。鬼神も中を窺いえず、盜賊も犯すことができない。ということであれば、その家はおのずからに富み、主の命長く、官位は永く保たれ、子孫も末永く続いていく筈である。儒学を職業としている私だからこそ、このことを最も深く肝に銘じておきたい。「慎まざるべけんや」の一文を置いてこの『池亭記』は結ばれている。保胤は、ここで儒学を天職としている自分は、本当はこのような聖賢の家に住むべきだった、これこそが本当の自分の家でなければならなかった。だが、そのことが分っていても、現実を生きる以外に仕方がない人間であるのであれば、せめてこれを理想とし、あるいは教訓としつつ、慎み深い生活を保っていきたいと記していた。

『池亭記』の最大の特徴は、その執筆時点で官僚としての生活を送っている保胤の生の姿が描かれていることであり、その保胤は、官人として拘束されているという生活の現実を現実として身に受け入れつつも、心は何物にもとらわれることなく自由であろうとしていることである。そして、その心の自由と平

安を獲得すべく用意されたものが、池の西の弥陀の小堂での念仏と法華經の読誦であり、池の東の小閣、つまり書齋における読書三昧であった。読書の世界の中で古賢に会うことでもって、現実社会に充満している厭うべき俗生活での苦しみを乗り越え、批判し相対化することで自己の純粹さを保持し、心の自由を確保していたのである。さらに、「門を閉ざし」とあるように、完全に自分一人の空間を持って、独吟独詠に浸り、あるいは、庭園に出て子供等と純粹無垢の遊びの時間を持ち、また植物の世話をすることでもって、心のわだかまりをほぐし、平安なる心を得ることができたのである。つまり、「池亭」における保胤は、現実の社会生活と個人の内面生活、言いかえれば、公と私との住み分けを試み、見事にその調和に成功していたといつてよかったのである。

確かに、心の平安を弥陀の小堂に参じての念仏と法華經読誦とに求めたという側面は、浄土教の信仰者であって、儒教倫理を規範とする官人とは矛盾を来しているという指摘がこれまでなされてきたが、平安時代の浄土教が、現世を否定するものではなく、現世と来世の安楽を祈念する信仰であることが仏教研究において実証されつつある現在、「池亭」における保胤の信仰が、現実を強く肯定する儒教倫理を規範とする律令官人としての生き方と調和を保っていることは、何ら不思議なことではなかった。したがって、保胤にとっての理想の住居が、儒教の徳目によって構成された現実肯定の住居論であることも、むしろ当然のことだったのである。以上述べたことは、すでに後藤昭雄氏が論じられていることであるが、氏は更に「これはすでに住居論で

はない。これを逸脱して処世論となつて」おり、最後の「慎まざるべけんや」は、「これは一般論であると共に、自らに向かって発せられたもの」だと論じられている。(後藤昭雄氏『慶滋保胤』『岩波講座日本文学と仏教第1巻人間』平成5年11月岩波書店刊)

ところで、982年、まさに一千年前に書かれた、中の下の官人の住居論が提起している問題が、現代の我々が抱えている問題と何と重なりあっていることであろう。現代のサラリーマンに求められていることは、まさに職業人としての生活と、個人の内面生活のバランス、つまり、公と私の調和の取れた生活だからである。保胤の私生活における心の平安が、書齋における読書、独吟独詠・児等との遊び、また菜園の世話等々によって確保されていることはすでに見た通りであるが、現代人が今必死に探り求めている趣味生活、絵・音楽・ホームビデオ・パソコン等々も、基本的にこの構造を脱したものではないであろう。職業人として生涯を運命づけられている現代の一般人の生活における公と私の関係は、一千年間不変であったといつても過言ではなかったのである。

ただ、保胤の場合には救いがあったことに注意しておきたい。それは、儒学者が登用される内記の官職と、自分が生涯の精神生活の根幹として選んだ儒学とが、たまたま一致していたことである。現実の住居が抱えこんでいた否定面、50という年を迎え、あと長くも住めないことが分つていながら贅沢な家を建て、過剰なまでに家を愛してやまない自分を、天に畏れ、人に恥じなければならぬことに気付いた保胤は、そうした否定面を乗り越える方策として、自分の天性の仕事としての

儒学を持ってこることができたということである。前引の論考で、後藤氏が述べられたように、これは最早住居論ではなく、処生論となっているといわれても仕方ないであろう。しかし、この保胤の処生論は、現代の我々が大いに参考としうることでもあるように思う。つまり、各々の職業を、各々の天職・天性の仕事として磨きぬき、各々のその仕事でもって理想の住居を築くことが、人間にとっての最高・最強の住居であるとの論だったからである。

#### 『方丈記』と長明

『池亭記』は、保胤が儒教を規範とする官人であったこと、また、時代の浄土教信仰が現世肯定であったという2点において、一千年の隔たりを感じさせない程に、現代人に共通する点の多い住居論が展開されていたが、現世否定の浄土教信仰の中で、その信仰を成就することを目的とし、そうした生活空間の中で生涯を閉じることになったであろう鴨長明の、『方丈記』に見受けられる住居論を見ることが出来る。

鴨長明は、和歌と音楽の人であった。鴨氏は代々京都下賀茂神社の社家で、長明は同社の禰宜長継の次男として久寿2年(1155推定)に生まれ、7歳で中宮叙爵、従五位下となり、父方の祖母の家を継承し、菊太夫と称した。19歳の頃、保護者であった父を失い、神官としての昇進も閉ざされ、妻子とも離れ、30代には祖母の家をも去り、不遇な生活を送った。が、建仁元年(1201)47歳の折、後鳥羽院に抜擢され和歌所の<sup>よりうど</sup>寄人となる。後鳥羽院は彼を下賀茂河合社の禰宜職に<sup>ただすのやしる</sup>推すが、実現せず、長明は元久元年(1204)50歳の折に出家、大

原に隠遁する。法名、蓮胤。承元2年(1208)54歳の時、日野の外山に移り、方丈の草庵を最後の住み処として、8年後の建保4年(1216)、恐らくこの草庵において、念佛者であると同時に和歌・管弦の道の<sup>すまじや</sup>数寄者としてその生涯を閉じたのである。

『方丈記』は、建暦2年(1212)3月30日、長明58歳の折の作で、外山の草庵に入っただけで5年が経過していた。本作はすでに見た『池亭記』に倣ったもので、分量的には400字詰原稿用紙20枚程度の小品にすぎないが、古来、中世草庵文学を代表する最高作品の一つとして認められている。鎌倉初期の写本大福光寺本『方丈記』が、長明の真蹟を写した最善本として今日に伝わり広く行われている。いま、この本によって作品の概要を見てみるが、現代は全体を5段に分けて読むことが慣行となっているので、その順に見ていくことにする。

第1段は、序に相当する有名な文章である。

ゆく河の流れは<sup>た</sup>絶えずして、しかも、もとの水に<sup>よど</sup>あらず。淀みに<sup>う</sup>浮かぶうたかたは、かつ<sup>き</sup>消え、かつ<sup>むす</sup>結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と<sup>すみか</sup>栖と、またかくのごとし云々

と、一貫して「人と栖」の無常が主題として展開される。

第2段は、「予、もの<sup>われ</sup>の心<sup>し</sup>を知れりしより、四十<sup>よそじ</sup>あまりの」間に都を襲った5大災厄、安元3年(1177)4月の大火、治承4年(1180)4月の辻風、同年6月からの福原遷都による混乱、養和元・2年(1181・2)の大飢饉、元暦2年(1185)の大地震が、克明に描写され、その分量は全体のほぼ半分に達している。

第3段は、「そのかみ<sup>かた</sup>父方の<sup>おほぼ</sup>祖母の家をつた

へて、久しくかの所に<sup>す</sup>住む。その後<sup>のち</sup>、衰えて「つひに<sup>や</sup>屋とどむる事を<sup>え</sup>得ず、三十あまりにして、」<sup>ひとつ いほり</sup>「わが心と、一の庵を<sup>むすぶ</sup>。これをありしすまひにならぶるに、十分が一なり」と、我が身と栖の衰退のさまを述べ、ついに自分の<sup>みじか</sup>「短き運」を悟り、50歳の春出家し、大原に隱遁したこと、そして4年後、日野の外山に方一丈の草庵を結ぶに至ったことを述べ、草庵生活の快適さを自賛する。分量は全体の4分の1相当で、方丈の様子、また生活のさまを具体的に述べた重要な部分である。

第4段では、第3段に続けて、都から離れた山中の生活に俗界のわずらわしさが無いことを強調し、<sup>ひとま いほり</sup>「一間の庵、みづからこれを愛す」、<sup>す</sup>「住まずして誰かさとらん」と閑居の気味を力説する。

しかし第5段では、こうした草庵生活に対する愛着の念を、仏教者の立場から厳しく反省し、<sup>さうあん あい</sup>「今、草庵を愛するもとがとす。閑寂に<sup>ぢやく</sup>着するもさはりなるべし」と述べた上で、「みづから心に問ひてはいはく、<sup>よ のが さんりん</sup>世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、<sup>なんぢ</sup>汝、すがたは<sup>むじり</sup>聖人にて、心は濁りに<sup>し</sup>染めり、<sup>もし</sup>「若これ、貧賤の報のみづからなやますか、はたまた、<sup>まうじん</sup>妄人のいたりて狂せるか。そのとき、心更に<sup>こた</sup>答ふる事なし。只、かたはらに<sup>ごっこん</sup>舌根をやとひて、<sup>ふしゃう</sup>不請阿弥陀仏、兩三遍<sup>まうし</sup>申してやみぬ」という文章でもって全編が結ばれる。草庵を愛し、閑寂に着して、心を修め道を行なうことのおぼつかない自分に対する苛立ちと厳しい自己批判となっているが、佐竹昭広氏が述べておられるように、『方丈記』は「この苦渋に満ち、緊張感あふれる最終段を持つことによって」「はじめ、単なる方丈賛美の美文に終始せず、思想性の深い

中世の自照文学として、独自の境位に到達し得た」ことは、だれもが認めるところであろう。(長明及び『方丈記』についての記述は、佐竹昭広氏の『日本古典文学大辞典』(昭和59年岩波書店刊)の項目、「鴨長明」「方丈記」によるところが多い)

この『方丈記』の住居「草庵」は、まことに特異なものである。第3段冒頭で、祖母から伝えられた家を守ることができず、30余年後、10分の1の家を作ったことを述べるが、長明は、従五位の下であったから、慶滋保胤と同じ2400坪の家から、240坪への縮小だったことになる。その後、日野の外山に結んだ草庵は、「これを<sup>なかご</sup>中比のすみかにならぶれば、また百分が一におよばず」というものであった。また、その建物の様子は、「<sup>よ つね</sup>世の常にも似ず。広さは<sup>ひろ</sup>わづかに<sup>ほうぢやう たか</sup>方丈、高さは七尺がうち也。所を<sup>をも</sup>思ひ<sup>さだ</sup>定めざるが<sup>ゆへ</sup>故に、<sup>ぢ</sup>地を<sup>し</sup>占めてつくらず。土居を組み、<sup>つちあ</sup>打覆<sup>く</sup>みを<sup>うちおほ</sup>葺きて、<sup>ふ</sup>継目ごと<sup>つぎめ</sup>に<sup>かけかね</sup>懸金を懸けたり。もし<sup>も</sup>心にかなはぬ事あらば、<sup>ほか</sup>やすく<sup>うつ</sup>外へ<sup>わづら</sup>移さむがためなり。その<sup>あらた</sup>改めつくる事、いくばくの<sup>つ</sup>煩ひかある。積むところ僅かに二両、車の<sup>わく</sup>ちからを<sup>ほか</sup>報ふ外には、さらに<sup>ようどう</sup>他の用途いらず」というものであった。何と『方丈記』の「草庵」は、組み立て式の移動式住居だったのである。長明自身が、「<sup>むそぢ</sup>六十の<sup>きえかた</sup>露消方に<sup>をよ</sup>及びて、<sup>さらに</sup>更すえはのやどりを<sup>むすべ</sup>る事あり。いはゞ、<sup>ひとよ</sup>旅人の一夜の<sup>やどり</sup>宿をつくり、<sup>おい</sup>老たるかいこのまゆをいと<sup>むがごとし</sup>なむがごとし」と述べているように、その草庵は、家・住居というべきものではなく、ようやっと身体を入れることのできる「かいこのまゆ」に等しいものだった。そしてこの草庵は、同時に社会的人間生活を拒絶した空間でもあったのである。長明がこうした「草庵」へ行きついたこ

とは、一つには、時代が現世肯定の古代律令制の社会から現世否定の中世社会へと大きく変わっていく中で、長明自身が現世否定の新しい浄土信仰に生きることを決意したこと、また、いま一つは、個人的にもろに時代の激変と混乱に巻き込まれることで、自分自身の運命のつたなさ、「<sup>みぢか</sup>短き運」を悟ったことに帰着するであろう。組み立て移動式の草庵は、長明の現世否定を象徴していたとって過言ではなかったのである。

しかし、それにもかかわらず長明は、容易にこの世を否定することができなかつた。それは、四季を楽しみ、管弦を楽しみ、草庵の閑寂さと静かさを楽しむことを、心より愛し、「今さびしき住み、一間の庵、みづから是を愛す」と述べ、さらに「住ずして、誰かさとりむ」と、豪語さえしていたからである。

しかし、現世否定の浄土信仰に生きることを最終目的とした長明にとって、それらが仏道修業のさわりとなることも自明のことであつたに違いない。このことは、長明が第5段において、「仏の教へ給ふ趣きは、事に触れて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するもさはりなるべし。いかゞ<sup>えう</sup>要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさむ」と、自ら記していることに明らかである。そして、これに続けて、ギリギリの自問自答がなされる。「<sup>よ</sup>世を遁れて山林に交はるは、心<sup>を</sup>修めて道を行なはむとなり。しかるを、<sup>なんぢ</sup>汝、すがたは<sup>ひじり</sup>聖人にて、心はに<sup>し</sup>ごりに染めり。栖はすなはち<sup>じやうみやうこ</sup>浄名居士の跡をけがせりといへども、持つところはわづかに<sup>しゆり</sup>周利槃特が行に<sup>おこなひ</sup>だに及ばず。若<sup>もし</sup>これ、貧賤の報のみづからなやますか。はた又、<sup>まうじん</sup>妄心のいたりて<sup>きやう</sup>狂せるか」と。しかし、「そのとき、心、更に答ふる事なし」とあ

って、答えはなく、「かたはら<sup>ぜっこん</sup>に舌根をやとひて、<sup>ふしやう</sup>不請阿弥陀<sup>まうし</sup>仏両三遍<sup>や</sup>申て已みぬ」と、ただ念仏をとこなえるのみということで一編が結ばれる。結局のところ、長明が仏道に悟りを開いたかどうかは、永遠にわからない仕組みになっているのである。

以上見てきたごとく、長明にとっての草庵は、愛し執着するがゆえに道の修業のさわりとなつたとも考えられるが、『方丈記』にそうした自問自答を書きつけることで、そこからの脱却がはかられたとも考えられないわけではない。たとえば、『方丈記』執筆後4年間の長明の消息が具体的に知られないことは、長明がそれ以後見事に仏道修業を達成し、道を悟つたと考えることもできるからである。もしそうであつたとすれば、草庵とは、仏道の修業をさまたげるものであつたと同時に、仏道修業の達成を保障するものでもあつたということになろう。ともあれ、長明における方丈の草庵は、最も根源的な人間の精神活動である思索への欲求を保障してくれる最後のギリギリの空間として見事な役割を果していたとってよいであろう。

### 『幻住庵記』と芭蕉

鴨長明が方丈を営んだ笠取山の西の麓日野の外山に対して、笠取山から東に連なる峰の一つ国分山の山麓で、長明からおよそ480年を経た元禄3年(1690)の夏の約3ヶ月半の草庵生活を楽しんだのが、元禄文学を代表する俳人松尾芭蕉である。その草庵は、膳所藩士菅沼曲水の叔父幻住老人が住み捨てたものだったが、そこで草庵生活をもとに、長明の『方丈記』に倣うことで書かれたのが『幻住庵記』であつた。この作品において芭蕉は、

草庵というものをどのようなものと扱っていたかを考えると同時に、そのことが俳人芭蕉の詩人としての生き方とどのようにかかわるものだったかといった問題を考えてみることにする。

芭蕉は、寛永21年（1644但し12月1日改元正保元年）伊賀上野赤坂町で、松尾与左衛門の次男として生まれた。松尾家は、無足人階級（無給で準士分待遇を受けた農民）であったが、与左衛門は、青年の頃父祖伝来の地（伊賀国阿拝郡柘植郷）を離れ、無足人の資格を失って、伊賀上野に移住してきたといわれる。家は長男の半左衛門が継ぐが、芭蕉は、俳諧師となるべく江戸へ下るまでの28年間を、この赤坂の家で過ごしたことになる。18・9歳の頃より23歳まで、上野城の侍大将藤堂新七郎家で、台所用人ないしは料理人として出仕し、この間俳諧好きであった2歳年上の藤堂蟬吟に仕えることで、芭蕉は俳諧をたしなむと同時に生涯の仕事として俳諧を選ぶことになったといっただけよい。この28年間の郷里での生活の具体は残念ながら知りえないが、手習いの先生のようなアルバイト等で何とか生活の資を得ていたかと想像される。こうした生活を送っていた芭蕉に、自分の家と呼べる家はなかったといった方がよいであろう。次男坊の宿命として家を継ぐことは出来ず、自分の生家ではあっても居候の立場であるわけで、家を出ていくことが生まれた時点より運命づけられていたのである。

29歳で江戸へ出た芭蕉は、念願がかなって、5年たった34、5歳の頃には、流行の江戸の俳諧師として一家をなすことができたが、生活は江戸市中での借家住いであった。37歳の冬、都心の小田原町から深川村に移り住み、

草庵生活を始めることになるが、これ以後死にいたるまで芭蕉は、一貫してその住居を門弟達の誰かに世話してもらって過ごすことになる。このことを現代風にいえば、自分でアパート代を払って生活した時期は、江戸市中で俳諧師としての経営をしていた間だけだったということになる。その後の芭蕉は、死に至るまでホームレスであり続けた。しかしてその芭蕉は、ホームレスであることを隠すどころか、内心どこかで誇りとしていたようである。元禄3年12月京都では、

いねいねと人にいはれても、猶喰あらず旅のやどり、どこやら寒き居心を乞ひびて住つかぬ旅のこころや置火燵（勸進牒）と詠み、同じ頃大津へ移っては、

乙州が新宅にて

人に家をかかせて我は年忘（猿蓑）

と、ホームレスの自分を見事に戯画化さえているからである。元禄に入る頃より、自分の境涯を乞食にたとえ、たとえば、「今年の旅は、やつしやつして薦かぶるべき心懸けにて候」（元禄2年閏正月乃至2月の初旬頃筆、猿蓑宛（推定）書簡）のごとくに門人達にいうことが多くなっていく。芭蕉は、家を持つどころか、乞食の境涯に身を置き、ホームレスでもって生涯を終えることを決意し実行したのである。

では、こうした芭蕉にとって、住居というものが何の意味もないものであったかという点、当然のことながら、一概にそのように言い切れるものではなかった。それは、人間である以上、生命を維持していく上だけでも、何らかの住居が要請されるからである。ホームレスといえども、雨風をしのぐためには、何らかの建造物の一部を借用せざるを得ない



のと同じように、芭蕉も常に他人が提供してくれる何らかの「宿り」を必要としたのである。芭蕉は、そうした自分の境涯を、『幻住庵記』では、「予、また市中をさる事十年計にして五十年やちかき身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂ふ」と表現している。(以下『幻住庵記』本文の引用は『新日本古典文学大系70芭蕉七部集』(平成2年3月岩波書店刊)による)つまり、深川の草庵に入って4年後、『野ざらし』の旅に出た40歳頃からの10年間を、一貫して漂泊の境涯ととらえていることが注目されるのである。したがって、草庵にいる時も、旅にある時も、同じ漂泊の中に居ると芭蕉は考えていたことになる。『幻住庵記』中の「すべて山居といひ旅寝と云、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑計、枕の上の柱に懸たり」という文章に明らかなように、本当に自分にとって大事なものは旅の具だともいっていたのである。芭蕉は確かに幻住庵が気に入って、「卯月の初、いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ」と記してはいるが、漂泊を境涯としている芭蕉は、健康さえ許せば、漂泊を続けたかったのである。たとえば、6月20日、幻住庵において書かれた金沢の小春宛書簡の文面には、「残生いまだ漂泊やまず、湖水のほとりに夏をいとひ候。猶どち風に身をまかすべき哉と秋立つ此を待ちかけ候」とあって、当時の芭蕉の本心が吐露されているとあってよい。とすれば、芭蕉にとっての幻住庵は、分に過ぎたこの上もなく贅沢なものとなってくる筈である。このことは、4月10日付で幻住庵より美濃の如行に宛てた

手紙の文面、「幻住庵と申す破茅、あまり静かに風景面白く候故、是にだまされ、卯月初め入庵、暫く残生を養ひ候。(中略)長明が方丈の跡も程ちかく、愚老不才の身には驕り過ぎたる地にて御坐候」、また、同月16日付酒堂宛書簡中の、「庵も賜物、富貴に候」という言葉に端的に示されていたといえよう。以上のことが確認できるとすれば、こうした漂泊の境涯を実現するために、芭蕉は、ある意味で生身の人間に不可能な生活様式を理想として選ぶようとしていたことが推測されてくる。

『幻住庵記』の草稿断簡中の一文、「この六とせむかしより、たびごころ常となりて、むさしのに草室もとく破り捨て、無庵を庵とし、無住を住とす。かさ一つをわがものとし、草鞋を常の沓とせしに、おもはざるこの山に心とどまりて、しばしのたび寝をなぐさむ事になんなりぬ」の傍点部の「無庵・無住」の思想がそれである。したがって、『幻住庵記』再稿の中で、「日野山は未申の方にあたり。かの方丈の昔をしのぶ」といいつつも、「いひつらぬれば、隠士長明の糟粕にひとし。げにや、琵琶は海に有り、琴は松に有り」と、長明を意識しつつもあくまで長明に倣うのではないとの主張をしていることも忘れてはならないことである。では芭蕉は、何ゆえに漂泊を選び、「無庵・無住」に生きることを願ったのであろうか。それは、自己の生涯をかけた俳諧文学達成のために、最も自由な立場に自分を置くためだったとあってよいであろう。『幻住庵記』の結び、

傭年月の移こし拙き身の料をおもふに、  
ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たび  
は仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどり  
なき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、

しばらく生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。楽天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦たり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

は、結局俳諧文学に命をかけた自分に対する自信の表明であり、全くこうした生涯に悔いはないとの宣言だったと読みとってよいように思う。白楽天・杜甫に対しての謙退は、単なる謙退ではなく、俳諧文学達成のために、彼等に劣らぬ努力をしたことへのひそやかな自信の表明でもあったのである。幻住庵の「幻住」に言いかけた「いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ」という結びの文章には、なにやらふてぶてしさもが感じられるのであるが、「まぼろしのすみか」が、「無庵を庵とし、無住を住とするのだ」という意味だったとすれば、それは見事な漂泊の境涯の達成だったといわねばならないであろう。

芭蕉にとっての草庵は、保胤のいう現実社会から隔離された一時の安息の場でもなく、長明のごとく仏道修業のために厭うべきものでもなく、俳諧という文学に命を懸けている者の生命とより自在な創作のための場を、一時的にせよ、保障してくれるものでさえあれば、どのような草庵でも、そうした意味での「仮の宿り」として、この上もなく有難いものだったということになる。芭蕉は、保胤とは真反対に、現実の社会生活を拒否したが、決して長明のごとくに現世を否定したのではない。近世人である芭蕉は、平安人である保胤以上に現実を肯定し受け入れたのであるが、ただ、俳諧文学に生涯を捧げるために、現実生活のわずらわしさの一切を捨て去ったのである。しかし、長明が最後の最後において、

信仰のための思索の場が最低必要だったように、一切を捨てて俳諧に命を捧げた芭蕉といえども、その俳諧文学の創作のためには、その創作活動の自由を最もよく保障してくれる場が最低必要だったことはいうまでもないであろう。そうした芭蕉にとって、「仮の宿り」を得た時の心境は、それこそ「庵も賜物、富貴に候」であったに違いないのである。芭蕉は、俳諧の創作、つまり詩作のためにのみ草庵を欲したのである。こうした意味において、私は芭蕉を文学に殉じた最も純粋な詩人だったといてよいように思う。

(完)

#### 略 歴

氏名：Toshiyuki Inoue

学歴：昭和41年 九州大学文学部卒

昭和47年 九州大学大学院文学研究科  
博士課程国語学国文学専攻  
中退

平成4年9月 文学博士

職歴：昭和47年4月 高知女子大学講師

昭和50年4月 静岡女子大学助教授

昭和52年4月 福岡女子大学助教授

昭和58年4月 福岡女子大学教授

著書：貞享期芭蕉論考 平成4年4月 臨川書店

好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝 新日本古典文学大系76 (共著) 平成3年10月 岩波書店

時雨会集成 (共編) 平成5年11月 義仲寺・落柿舎

俳句集 (共編) 平成6年5月 汲古書院

委員：昭和62年～ 日本近世文学会委員

平成6年4月～ 柳川市史編纂委員